

統一テーマ「ロマンス諸語における前置詞」

町田健（とりまとめ）

§ 1 はじめに

日本ロマンス語学会第 50 回大会の統一テーマは「ロマンス諸語における前置詞」であった。この枠内で黒沢直俊、福寫教隆、土屋亮、藤田健、山本真司、鈴木信五およびロンバルディ・ヴァラウリ・エドアルド（敬称略、以下同様）による 6 発表（持ち時間各 20 分）が行われた（6 件目は共同発表）。黒沢はポルトガル語、アストゥリアス語、ガリシア語の前置詞、福寫はスペイン語の前置詞、土屋はスペイン語を中心にフランス語やイタリア語の前置詞に関係する事例、藤田はフランス語の前置詞 *à* とスペイン語の前置詞 *a* の意味特性、山本はフリウリ語における前置詞と人称代名詞の融合現象、鈴木およびロンバルディ・ヴァラウリはルーマニア語とイタリア語の前置詞付き目的語に関する問題を論じた。休憩を挟んで、総合討議が本稿筆者の司会のもとで行なわれた。このうち山本、鈴木およびロンバルディ・ヴァラウリの発表は論文として、藤田の発表は研究ノートとして本号に掲載されている。さらに黒沢、福寫は報告として発表の内容を掲載している。

§ 2 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と、それを巡って行なわれた討議の概略を記す。

（1）黒沢直俊「前置詞に見るイベリア半島西部の時間と空間」

ポルトガル語、アストゥリアス語、ガリシア語を中心に前置詞の概要や頻度を概観した報告で、ロマンス諸語の前置詞は似たり寄ったりではあるものの、各言語に特徴があることが確認された。ポルトガル語は、前置詞と連続する文法語との結合形（縮合形）が比較的多いことや、前置詞の重複用法が、言語的に近いスペイン語と比べると多いこと、さらに直接目的語の前に現れる前置詞 *a* がほとんどないことが指摘出来る。一方、アストゥリアス語は、ロマンス語学的に古い形式が多く、規範形成がほとんどないためバリエーションが多いことなどが挙げられる。アストゥリアス語やガリシア語には、前置詞と冠詞などの結合形が多い。頻度という観点から、ポルトガル語、アストゥリアス語、スペイン語、フランス語、イタリア

語、ルーマニア語の前置詞や前置詞句についての比較や、中世ポルトガル語の複数の文献の前置詞の頻度調査を行い、現代語と比較した。総じて各言語の特徴や前置詞の変化などが浮き彫りにされたと言える。

総合討議では、直接目的語の前の前置詞 *a* や、アストゥリアス語の *per* と *por* の使い分けなどについての質問があった。

(2) 福嶋教隆「スペイン語の前置詞概観 — *de* を中心に —」

発表では、スペイン語の前置詞 *a*, *ante*, *bajo*, *cabe*, *con*, *contra*, *de*, *desde*, *durante*, *en*, *entre*, *hacia*, *hasta*, *mediante*, *para*, *por*, *según*, *sin*, *so*, *sobre*, *tras*, *versus*, *vía* について用法や語源などを概説した後、前置詞に関連する現象として、他品詞の前置詞的用法や前置詞の他品詞的用法、前置詞の連続や中和、複合前置詞、動詞との組み合わせなどについて紹介した。さらに、発表の後半では、*a* と *de* を特に取りあげ、日本語、フランス語、イタリア語、英語との対照を通じてスペイン語の前置詞の特異性を浮き彫りにし、今後の研究の方向性などを指摘した。*a* に関しては定名詞である人間を意味する直接目的語の前で使用されること、*de* については難易文、名詞修飾節、*dequeísmo* と称される誤用現象などを中心に説明された。

総合討議では、*de* について質問があり、誤用表現で *de* が拡張する例や、逆にあるべきところでなくなる例などの指摘や、前置詞 *en* と *a* の中和現象などが議論された。

(3) 土屋 亮「種々の前置詞に形容詞が後続する事例について」

発表では、スペイン語の *de*, *por* を中心に他のロマンス語における相当語などとの検討を通じて、そもそも前置詞はどのような語を支配する語なのかというテーマについて話された。スペイン語の *¡Qué grande es tu coche!*, **¿Qué grande es tu coche?*, *¿Cómo de grande es tu coche?*, **¿Cómo de grande es tu coche!* などからスペイン語では *qué grande* と *cómo de grande* が相補的な分布をなすという主張がある。同じような例でフランス語やイタリア語では *de* が現れず、逆に不定・否定代名詞を修飾する形容詞には *de* が現れるフランス語やイタリア語に対して、スペイン語では現れないことなどが言及された。さらに、スペイン語の前置詞 *por* や、前置詞と形容詞の慣用表現における冠詞の有無などについても扱われた。

総合討議では、前置詞に支配されるものは何なのか、原則的には名詞句ということになるが、実際には副詞が来ることもあり、解釈の可能性などが議論された。ただし、被支配語にばらつきが見られる前置詞は限られ、スペイン語では *de*, *en*, *por* ぐらいではないかという指摘があった。

(4) 藤田 健「フランス語の前置詞“à”とスペイン語の前置詞“a”の意味特性」

発表では、フランス語とスペイン語の前置詞 à と a について、フランス語からスペイン語に訳されたテキストと、逆にスペイン語からフランス語に訳されたテキストに見られる相違例の検討を切り口として、これらの前置詞と、意味的に関連する en の意味特性が検討された。両言語で共通する部分も見られるが、むしろ異なるものも目立つ。場所 (“être à Paris”—“estar en París”, “au premier étage”—“en el primer piso”, “aller en Espagne”—“ir a España”), 時間 (“au printemps”—“en primavera”, “peu de jours après”—“a los pocos días”), 用途 (“boîte aux lettres”—“buzón de correos”), 属性 (“une fille aux yeux verts”—“una chica de ojos verdes”, “café au lait”—“café con leche”), 対象 (“peur du loup”—“miedo al lobo”), 目的 (“il entra pour payer”—“entró a pagar”) などで、さらに基本的に同じ意味を表す動詞でも両言語で選択される前置詞が一致しない例 (“penser à”—“pensar en”, “participer à”—“participar en”, “traduire en”—“traducir a”) もある。これらを説明するために「場所性」, 「方向性」, 「局所性」という意味的な特性が導入され、3つの特性を両前置詞は共有するが、その強さという点が違い、それが意味機能の相違を引き起こしているという。

総合討議では、スペイン語の直接目的語の前の a を「場所性」という概念でとらえきれるかとか、フランス語の a と en の交替には音声環境で規定されるものもあること、さらに「局所性」という意味的特性の解釈などについて議論があった。

(5) 山本真司「フリウリ語の「人称代名詞前置詞」(あるいは前置詞と人称代名詞の融合)」

フリウリ語には、前置詞と冠詞の結合形も存在するが、前置詞と人称代名詞与格が融合したタイプの、他のロマンス語にはあまり見られない「人称代名詞前置詞」が見られる。主に、intôr, daûr, incuintri という前置詞と人称代名詞の与格形が結びついたもので、Marchetti などは人称変化のパラダイムとして挙げるほどである。このような現象は、アラビア語、ヘブライ語、アイルランド語などにも見られるが、これらでは問題の現象がかなり大きなパラダイムをなすほどに発達しているが、フリウリ語では、このような現象を示す前置詞は、むしろ非本来的な前置詞である上に、さらに非常に限られた場合にしか使われないという点が異なっている。発表では、調べた用例などから、このような「人称代名詞前置詞」の用例は、前置詞の意味に関しては派生的な意味で用いられる場合が多いのではないかと、今後の研究課題としてどういう前置詞がどういう語句で用いられるかなど調査が必要だが、フリウリ語の方言差や個人差を考えると困難が多いとされた。

総合討議では、用例の詳細などについての質問があった。

(6) 鈴木信五, ロンバルディ・ヴァッラウリ・エドアルド

「Accusativo preposizionale in italiano e in romeno」

発表はイタリア語で行なわれ、前半のルーマニア語についてを鈴木信五が、後半イタリア語と結論をロンバルディ・ヴァッラウリ・エドアルドが行なった。前置詞付対格目的語、すなわち目的語の前に前置詞が現れる現象は、スペイン語で広く知られるが、イタリア語やルーマニア語にも存在する。ところが、この現象が現れる条件が同じでも、それが可能な領域は両言語では大きくずれている。ルーマニア語だけが義務的なゆるぎない領域をもち、目的語が人称代名詞や人を表す固有名詞からなる場合、ルーマニア語では前置詞による標示が義務的なのに、標準イタリア語では一般にこれが可能であるに過ぎない。発表は、具体的な現象を詳細に検討した後、このような現象を、通時的にそれぞれ発展段階の異なる同一の現象と見なすと、意味・統語上の条件が互いに共通していることが見えるとした。

総合討議では、通時的な発展段階を跡づけるような資料の存在や方言状況について質問があり、ルーマニア語については16世紀の初期文献ですでに *pe* がついた形があること、イタリア語は北部方言は発展段階そのものが萌芽的なので、あまり見るべきものはないが南イタリアの方言や文献では、むしろスペイン語に酷似した状況が見られるという説明があった。また、方言によっては主格に前置詞がつく場合もあるという指摘があった。

§ 3 まとめ

6つの発表では、ポルトガル語、ガリシア語、アストゥリアス語、スペイン語、フランス語、イタリア語、フリウリ語、ルーマニア語が扱われ、前置詞に関連するさまざまな問題が議論された。しかし、総合討議で話題が集中したのは目的語の前におかれる前置詞と、その通時的発展についてであった。ラテン語からロマンス語へ過程での大きな変化のひとつである格の消失あるいは弱化という問題と密接に関連しているという意味で象徴的であった。